

沖縄歴史の散歩道

◆近代遺産を巡る①

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



戻る道(国頭村)



北谷トンネル(北谷町) 北谷町公文書館所蔵(1932年頃)

1879年(明治12)、廃藩置県により琉球王国は滅び「沖縄県」が設置され、新たな時代を迎えます。沖縄の文化財や史跡というと琉球王国の時代のものがイメージされますが、当然ながらそれ以外の歴史の営みが残っており、近代の文化遺産も点在しています。

沖縄県になってからの特徴は、輸送や移動の手段として陸上交通網が整備されていったことです。琉球の時代にも「宿道」と呼ばれる街道はありましたが、輸送のメインとしては海上交通で、宿道の各所は馬車が通れない険しいものでした。これら大規模工事によって「車道」として活用できる近代道路に変えていったわけです。



仲尾トンネル(名護市)

1884年(明治17)の那覇―首里間や翌年の首里―与那原間の道路整備がそのさきがけです。

近代道路整備のなかで沖縄に初めて登場したのが「トンネル」です。起伏の激しい地形を掘削し、道を通すということは琉球の時代には行われませんでした。初のトンネルは現在の国道58号線、北谷グスク付近にあった北谷トンネルで1905年(明治38)に開通しています。残念ながら沖縄戦直前の1944年に軍用道路建設で県道(那覇―読谷間)の拡張工事のためにとり壊され、現在見ることはできません。

1919年(大正8)には名護市の羽地に仲尾トンネルが、1920年(大正9)には国頭村と大宜味村の境付近に大國トンネルが、1924年(大正13)には

上里 隆史

(うへざと・たかし)



琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポニーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。

今帰仁村の運天トンネルがそれぞれ開通しています。とくに仲尾トンネルや運天トンネルは丘陵に囲まれた重要な港湾拠点と他の地域とのアクセスを容易にするために建設されました。海上交通と陸上交通の連結をスムーズにするという発想が、この時代に顕著となったのです。

トンネルだけでなく、移動を阻む丘陵や岩を削って道路を建設することも行われました。1912年(大正元)の国頭村の宜名真から北の辺戸へと向かう山道(いわゆる「戻る道」)や、1935年(昭和10)に丘陵をまるごと掘削して建設されたうるま市勝連の「ワイトゥイ(割り取り)」の道などです。大規模な土木工事で人やモノの往来もより便利となっていたのです。